

新しい障害児・者ケアの理念「スヌーズレン」—広島における現状—  
第1編 理念と現場での課題

広島大学医学部保健学科

太田 篤志

呉本庄つくし園

松本 真代 住久 貴美子 馬場 聡美 小林 裕子 三宅 正子

【はじめに】

著者は、これまで重度知的障害児のケア実践に携わってきた。しかし介入に対して反応が見えにくい重度知的障害児に、どのような活動を提供すればいいのかという問題は、絶えず直面しているものであった。このような混沌とした現状にある重度発達障害児に対するケアの在り方の一つとして、我々は、スヌーズレンの理念が有用であると考え、実践を試みてきている。

＜スヌーズレンとは？＞

「スヌーズレン」とは、重度知的障害児・者のための新たなケア理念として、1970年代、オランダにて始まり、近年、ヨーロッパを中心に全世界へ広がってきているものである。日本においても重症心身障害児・者施設を中心に急速に普及してきており、1999年、日本スヌーズレン協会が設立されている。

このケア理念は、重度知的障害であっても、自分自身の時間を自分自身で選択し活動できる場を提供することによって、生活の質（QOL）を高めることを目的としている。Kewin<sup>1)</sup>によれば、スヌーズレンとは、信頼とリラクゼーションの雰囲気の中のでつくられる楽しい感覚的経験であるとされている。感覚的経験は、重度知的障害児・者にとって受け取りやすい感覚刺激を提供する機器という物理的環境によって促され、信頼とリラクゼーションは、非指示的な援助者の関わり方という人的環境によって促される。

物理的環境の特徴は、知的な楽しみ方という

よりも感覚的な楽しみ方を提供する点である。対象者が好み魅了される雰囲気を生み出すために視覚、聴覚、触覚、嗅覚、前庭覚を刺激する様々な機器が開発されてきている。このような感覚的な楽しみ方は、一見奇異な印象を受けるものであるが、近年、Williams<sup>2)</sup>、Grandin<sup>3)</sup>らによって書かれた自閉症者自身の自伝などによって、このような活動は、彼らにとって非常に意味があるということが明らかになってきている。

また対象者と外界の相互作用も重視されており、簡単な操作で機器のコントロールが出来るようなデバイスも開発されており、対象者が環境を容易に探索できる機会を提供している。

人的環境の特徴は、「非指導的介入」によって援助者が対象者と関わる点である。これは、従来の治療的・教育的介入法などで生じる「ある目的を達成するというプレッシャー」から援助者を解放すると同時に、対象者もあらゆる期待から解放されることで、自分のペースで環境と関わる事ができる。このような関係性の築くことで、両者間に、心地よさ、安らぎ、楽しみの共有が生じ、相互理解が促されるとされている。

【広島における現状調査】

1999年、広島県において初めてのスヌーズレン講習会が開催されたのを契機に、我々の知的障害児通園施設では、2000年3月、スヌーズレンルームを設置し実践を開始した。まだ半年程度の実践ではあるが、現時点での現状及び課題

を明らかにするために、当園職員に対し、以下の調査を実施したので、報告する。

### 1) 調査の対象

現在、知的障害児、重症心身障害児に対してスノーズレン活動を提供している本園職員4名(保育士1名・指導員3名)を対象に調査を行った。すべての職員は、スノーズレンに関する講習会へ2回以上参加経験がある者である。

### 2) 調査及び分析手順

調査は、半構成的集団面接を用いて行った。面接の方法は、「あなたにとってスノーズレンとは?」「子どもの様子」「療育へのメリット」「実践の上での困難さ」等のテーマに基づく、フリーディスカッションである。面接での会話は、すべてビデオテープに記録し、その内容を記述データとした。記述データは、内容のまとまりによってセンテンスに分けられ、71分間の面接内容より79のセンテンスが抽出された。このセンテンスを質的研究手法の一つであるKJ法に類似した方法にて分析した。各々のセンテンスをその親和性によって階層的にグループ編成し、カテゴリの空間配置図を作成した後、それをもとにして文章による解釈結果を得た。

#### 【結果及び考察】

KJ法によるカテゴリ編成の結果、職員のスノーズレンに対する意見は、7つのカテゴリに分けられた(図1参照)。以下、各々のカテゴリ解釈結果について説明する。

#### ① スノーズレンへの困惑

実践の当初に見られた職員の困惑を示すものである。スノーズレン機器に対して、その人工的な感覚刺激によって醸し出される雰囲気には違和感を感じ、自分自身がリラックスできなかった等の意見がみられた。また「非指導的介入」に対しても、対象児を指導の対象と捉えず、じつと対象児のそばに寄り添うことに違和感を感じ

ている。さらに、「スノーズレンとはなにか?」ということ言語化すること、そこで生じている対象児の反応を因果関係で理解すること等が困難であり、スノーズレンの数学的には解決しない不思議さを感じ、職員は困惑している。

#### ② 自分なりにスノーズレンを捉える

困惑を感じながらも、職員は、自分の感覚的経験とスノーズレンの物理的特性を結びつけていくプロセスの中で、スノーズレンを自分なりに捉えていっている。自分がスノーズレンの中で心地よくリラックスできると感じた職員は、当初よりその価値を認めているが、違和感を持った職員には、自分の感性と対象児の感性のギャップを埋めるようなプロセスが生じていた。ある職員は、自分好みの音楽をスノーズレン環境の中に加えることで違和感が減少したと述べ、別の職員は、自分がダイビングをした時に見た海中風景との共通性に気づき、大自然のなかでの体験が得られにくい発達障害児にとっては、人工的な機器での擬似的な環境であったとしても、このような感覚体験は大切であると考えているに至っている。

#### ③ 普段と違う対象児の様子

日常生活の中では見られにくい対象児の行動が見られたと職員は述べている。例えば、普段嫌いな感触の物であってもスノーズレンの中では容易に触ることができたこと、注意の持続が困難な対象児であってもスノーズレン機器に対しては持続的に多様な関わりをみせたこと、楽しさを表現していると思われる発声が非常に豊かにみられたこと等である。また興奮した児童が自分でスノーズレンルームへ入り、自己沈静をはかるといふ行動も見られている。

#### ④ 子どもに変化が生じる理由

対象児に変化が生じた理由を明確に示すことは出来ないものの、職員が優しく対象児のすべてを受け容れるような療育スタイルへ変えたことによって、対象児は、その心地よさから思わずなにかを行ってしまうのではないかと職員は

推測している。またこのような職員の変化に伴う対象児の変化のプロセスが、スノーズレンの利点であり原点であるとも、職員は考えている。

#### ⑤ 理想と現実

スノーズレンを実践する上での理想は、対象児の必要性に応じて自由にスノーズレンルームを利用するという形態であると職員は考えている。しかし、療育時間やスタッフ数は限られており、絶えず時間に追われるような形でスノーズレンが実践されている。このような状況下での実践では、職員、対象児、共に十分にリラックスした状態を保つことが難しいと感じている。またスノーズレンを通して、共感を得ることができると言われているが、現実には、まだ対象児が感じていることが解りにくいと職員は感じている。

#### ⑥ 療育を見直す場として

スノーズレンルームは、対象児のためにあるのではなく、職員にとっても、慌ただしい療育環境において走り回らなくてよい、唯一時間が止まったような特別の空間であると感じている。仕事の雑用から精神的に解放され、気分転換がはかれたい、対象児のことをゆっくりと考えることができる場としての役割を職員は感じている。

#### ⑦ 自分の療育スタイルの変化

実践するなかで職員自身が優しくなったと感じ、また対象児に対して母性を感じたり、対象児の考え方をもっと謙虚に感じ取ることの大切さ、療育における心地よさの大切さ等を感じたと職員は述べている。

このようなスノーズレンの中で得たことを、絶えず自分の中に持ち、日常の療育場面に生かしていくことが大切であると職員は考えている。

#### 【まとめ】

約半年間の実践のなかで、著者らは、従来ありがちな子どもの発達を一方的に追い求める発想ではなく、ゆとりや心地よさのなかで原始的な体験を共に楽しむという理念に対して困惑しながらも、対象児の新たな側面を見だし、また従来の療育を見直すきっかけを得たと感じている。そしてスノーズレンとは、これまでの療育をより一層、対象児の立場から構築していくことのできる理念であると感じている。しかしながら、現実には、様々な物理的、人的、時間的制約があり、対象児に対して理想的なスノーズレン環境を十分に提供出来ていないという思いも強い。

今後、スノーズレンの理念を日常的な療育活動の中に少しずつ織り込み、実践を積み重ねるなかで、スノーズレン実践の枠組みをさらに明確にしたいと考えている。

#### 【文献】

- 1) Kewin, J. , Hutchinson, R. (1994) : Sensation & Disability, ROMPA, U.K. , p. 8
- 2) Williams, D. (1993) : 自閉症だった私へ, 新潮社, 東京, p. 25
- 3) Grandin, T. , Scariano, M. M. (1994) : 我、自閉症に生まれて, 学習研究社, 東京, p. 19